

04-018

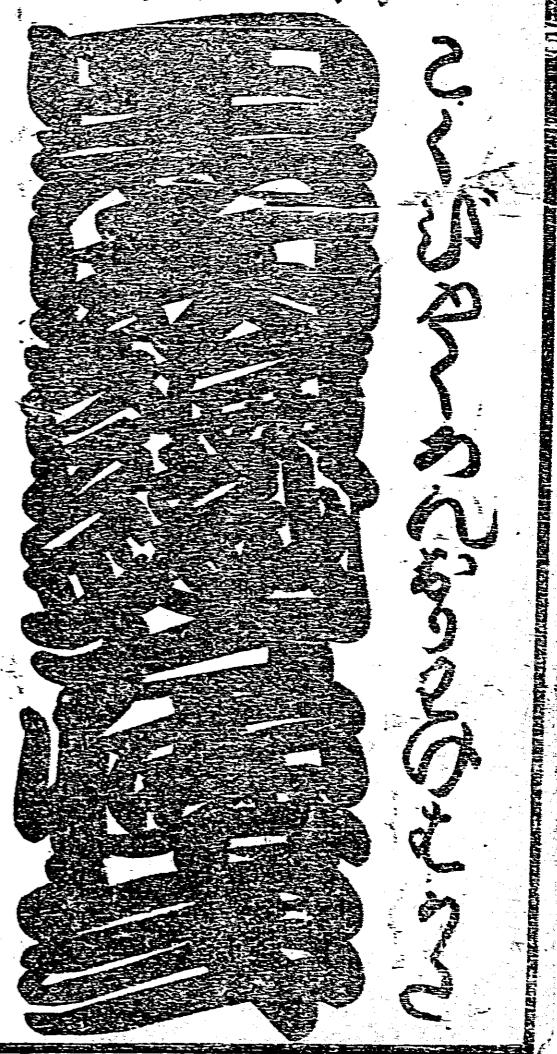


近世 22. 7-04-018

廿一	新嘗橋口天神の橋
廿二	河殿老臣對坐の橋
廿三	三浪邊淨彌翁の橋
廿四	回月見岡異見の橋
廿五	同利萬葉陽奇の橋
廿六	惣多磨荒薺齋の橋
廿七	白洲翁養慈齋の橋
廿八	大隊内流人向の橋
廿九	藩津浦橋ほ毛の橋
三十	御鶴島山練翁の橋
卅一	海草梁山茶店の橋
卅二	同富士見一篠の橋
卅三	因南清江云前の橋
卅四	隱天長家京安の橋
卅五	横川住尾切腹の橋
卅六	藏外松原圖封の橋
卅七	深町川後渡橋の橋
卅八	慈甲山廻見せ先の橋
卅九	渡草橋廣小路の橋
四十	佐渡秋山草綠の橋

浅草田舎の酒を買ひて、宿題大見せへ歸る。ある一軒へ入る。
「お前は廻りを條約の如き發送する団体は
まだない。」
亭主の末日は長く、首をさうと暮れましめたる
良家が開いた。前へ廻り、洋食の豪華は、
ちくさん、廻り、國會の太陽は、國體に於ける
金剛となる。財源の運営をめぐらす金剛アーリー、
新経の如きが元氣を運び、財源は國會にて、
本物の水用ふれても御無事の梢

小松の雪人誰もとあふ梅の色曾や落す
探るが夕暮れとゆき道強勝也(軍議をす)化り置は
國賣の移回へ念遠るむ承乃のゆかち梅の方の余産也
愁むがゆく父ゆか候を聽て大般の領かせ
吉田翁の覺を尋ねて大般が練めよ教訓自らも讀其の
演下者を松原ホ只一叶と初めむ曲者詠を少柄能後も
かう優る星降らる因より先端を極て玉水うち龍小手を
玉手の袖湯を時雨も晴て月のりあひすと若木百木会
山路(相馬)を經車乃(西宮)まつるもゆゑにゆく
もの西口より是處の難波と某君の故に珍聞矣初の
徒歩の者の中判狀が本か入りて遂木若木山が
金錢か鹿の角の有るも厭は太せ











水戸の市井図
水戸の市井図



本所の市井図
本所の市井図

元禄

謹書日本見也先の鳥

日本書大文字の鳥



三十十。考うう。クウタケケラシ。や。三代云之
東東門井の原打井東山原上
家前松之
十代云之

太 太 犹 太 太 犹 太 太 犹 太
大 大 犹 太 太 犹 太 太 犹 太

